
RGS ~レトロゲームシスターズ~

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RGS ～レトロゲームシスターズ～

【Nコード】

N7085Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

父親を亡くした3姉妹。その父親が遺してくれた形見は、膨大な数のレトロゲームだった。ゲームが大好きだった父親を思い返しながら、3姉妹はレトロゲームで遊び始めた。

小説……ではないです。レトロゲームをネタにした話です。

こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、わかりませんが……。

第0話 こうして3姉妹はレトロゲームを始めた

【序章 カイコの独白】

お父さんが、死んだ。
私たちが3姉妹にとって、受け入れがたい現実。

大好きだったお父さん。
もう笑いかけてくれることはない。
もう怒ってくれることもない。

まだ幼かったミコは泣きじゃくっていた。
いや、小学生だったチヨコも私も、声を枯らして泣き続けたっけ。

でもお母さんだけは、私たちのそばで毅然とした態度を崩さなかった。
ただ私たちが寝入ったあと、声を押し殺して泣いていたのを、私は知っている。

あれから数年。

お母さんは私たちを養うため、必死に働いている。

お父さんはゲームが大好きだった。
その影響で、私たちが3姉妹もゲームが大好きになった。

家計は苦しかったけど、お母さんは私たちがゲームするのを止めたりはしなかった。

お父さんが好きだったことを、お母さんも知っているから。

ある日、お父さんの部屋にこっそり入った私たちは、見つけてしまった。

お父さんの遺した、宝の山のごとき、レトロゲームの数々を。

【愛する娘たちの日常】

さて。

俺の愛する娘たちは、今どうしているかな。

もう俺が死んでから何年も経ってしまった。

俺のことなんて、すっかり忘れてしまっているかもしれない。

それならそれで構わない。すっぱり諦めて帰ることができるからな。

……いや、もちろん悲しいとは思うが。

だが、俺のことなんて忘れてしまったほうがいいのかもしれない。

娘たちには幸せになってほしいのだから。

懐かしの我が家が見えてきた。
少々怖い部分もあるが……。
のぞいてみることにしよう。

どれどれ……。

おっ。3人とも集まっているみたいだな。
おや？ あそこは俺の部屋のはずだが……。

……………。

そうか。俺の宝物だった古いゲームを見つけたのか。
もちろん一番の宝は娘である彼女たちだったわけだが。

薄汚れた古いゲーム。

俺が死んだあとも、隠したままになっていたんだな。
隠していたというよりも、古いから仕舞っておいただけだったが。

とはいえ、娘たちにとっては時代遅れのゴミでしかないだろう。
こんな汚いのが残ってた。捨ててしまおう。
そんな会話の果てに、ゴミ袋に投げ込まれてしまう運命が待っているに違いない。

しかし、俺が苦笑まじりで思い描いたような展開にはならなかった。

チヨコ「カイコ姉、これって……」

カイコ「ゲームねえ〜。しかも古いわ。さすがお父さん〜」

ミコ「姉様方、おふたりとも、目がキラキラ輝いてますね」

チヨコ「そういつミコこそ！ ほら、ヨダレ拭けよ！」

カイコ「ふふつ。私たち、ゲームが大好きなものねえ〜。お父さんの影響で」

ミコ「父様は神様です！」

チヨコ「出た！ ミコのオヤジ信仰！」

ミコ「なんですか、チヨコ姉様！ 悪いとでも言っんですか!?!」

チヨコ「べつに悪かねえけどよオ……」

カイコ「ふふつ。ミコはお父さんにべつたりだったものねえ〜。

まだ幼かったけど、ミコが『おとうちやま〜』って呼ぶ声、
今でもはつきりと耳に残ってるわ〜。

よちよち歩きで、まだ可愛かったのよねえ〜」

ミコ「ちよ……、カイコ姉様！ 赤ん坊の頃のことなんて、忘れて
くださいー！」

カイコ「いい思い出よあ〜？ 忘れてたらもったいないわ〜」

チヨコ「そうそう。ミコをからかう、いいネタになるしな！」

カイコ「ふふっ、そうね」

ミコ「姉様方、いぢわるです……」

チヨコ「まあ、それはともかく……。このゲームの山、すげえな！」

ミコ「ミコたちが今これを見つけたというのは、天国の父様のお導きかもしれません」

カイコ「そうねえ……。それじゃあ、これから1本1本、みんなですんでいきましょう！」

チヨコ「異議なし！」

ミコ「はい、カイコ姉様！」

……。

カイコ、チヨコ、ミコ……。

俺の知っている頃からすると、随分と大きくなった娘たち。

3人とも、俺のことを忘れてなどいなかった。

しかも、俺の遺したゲームの山を 時代遅れの化石染みたゲームの数々を、喜んで遊んでくれるというのか。

ありがとう……3人とも……。俺には、すでに流せなくなっているはずの涙が、心の奥底から込み上げてくるように感じられてならなかった。

せっかくだし、娘たちの様子をしばらくのあいだ観察してみることしよう。

今の俺には、時間はそれこそ無限にあるのだから。

【人物紹介とルール解説】

カイコ「というわけで、私が長女のカイコ、高校1年生よ」

ミコ「カ……カイコ姉様、誰に喋ってるんですか!？」

カイコ「ふふっ、細かいことを気にしちゃダメよ」

チヨコ「突然家の中で自己紹介なんて始めて、

頭おかしくなったかと思っただぜ……」(ぼそっ)

カイコ「あら、チヨコ。なにか言っただろ?」

チヨコ「い……いやっ、なんでもない!」

カイコ「あら、そう？ ふふふ……」

ミコ「カイコ姉様、笑顔なのに怖いです……」

カイコ「ふふつ。私はおしとやかでか弱い女の子よ。」

それはともかく。

私はロールプレイングゲームとアドベンチャーゲームが大好きなの。」

チヨコ「アドベンチャーっていうか、ノベルゲームだろ！ それもBLの！」

カイコ「ちょ……！？ そ………そういうのもやるっただけよ！」

美形男子が出てくるゲームなら全般的に好きだもの！」

チヨコ「どちらにしても、ダメダメじゃないか？ カイコ姉、リアルではサッパリだろ？」

カイコ「うぐつ……！」

で………でも、可愛い動物とかが出てくるゲームも好きだもの！」

チヨコ「はいはい。今さらって感じだけどな。事實は事實なんだし。

………ま、紹介を続けるぞ？

オレは次女のチヨコ、中学2年。アクションゲームが大好きだ！

格闘ゲームやアクションパズル、レースにスポーツなんかも得意分野だな！」

カイコ「つまり、暴れるのが好きなのよねえ」

チヨコ「誤解を招く言い方すんなよ！」

カイコ「ふふっ、それにね、この子、可愛い女の子が大好物なのよ！」

チヨコ「うあっ、カイコ姉、なにを!？」

カイコ「事實は事實でしょ？」（ニヤリ）

チヨコ「くっ……、仕返してわけか……! この悪女め！」

カイコ「ふふっ、チヨコほどじゃないわよお」

ミコ「姉様方、ケンカはやめてください。お互いの暴露合戦なんて、見苦しいですよ？」

カイコ「あら、そうよね。さすがミコはいい子ね」。

「ってことで、この子が三女のミコ、小学校6年生よ」

チヨコ「っていうか、暴露合戦ってなんだよ、ミコ！」

ミコ「ひゃあ! チヨコ姉様、ほっぺたを引っ張らないでください
」!

カイコ「まあまあ、落ち着いて、チヨコ。

ミコは、シミュレーションゲームや思考型のパズルゲーム
なんかを

好んでプレイする頭脳派なのよね」

ミコ「あとは、シューティングゲームなんかも好きですね。

昔ながらの弾幕系とか、そういったもの専門ですけど」

カイコ「そうね。FPSなんかだと、チヨコの分野になるかしらねえ」

チヨコ「こんな感じで、好きなジャンルが結構分かれてるってのが面白いよな！」

カイコ「ふふっ。

だからこそ、それぞれが好きなジャンルを担当するって形にできるのよね」

ミコ「ゲームは初見プレイのほうが楽しいでしょうから、

担当者はネットであらかじめ調べたりしてはいけないんです

よね」

チヨコ「そうだな！ そのほうが面白くなりそうだし！」

カイコ「ええ。担当者は順番になるから、

次はどのタイトルにするかを他の2人で決めておく感じね」

チヨコ「担当者以外は、

ネットとかでいろいろ調べておいてOKってルールにするんだよな！」

カイコ「ふふっ。そのほうが、いろいろとツッコミも入れられるしね」

ミコ「……なんだかそのルールだと、

ミコだけ思いつきり姉様方からかわれそうな予感がするんですが……」

チヨコ「気のせい気のせい！」

カイコ「そうよあ〜？」

ミコも普段のうっぷんを晴らしちゃえばいいのよ、チヨコが担当のときにね」

チヨコ「カイコ姉だって当然標的になるだろ!？」

カイコ「あら、ミコはそんな悪い子じゃないわよねえ〜？
ねえ〜
〜〜っ!？」（ずずいっ）

ミコ「うっ……。はい、カイコ姉様……」（ガタガタ）

チヨコ「笑顔でその凄み……。カイコ姉……。やっぱり悪女だ……」

カイコ「なにか言った〜？」（にこにこ）

チヨコ「い……。いや、べつに……」

カイコ「ふふっ。とりあえず、最初の担当者はチヨコに決定ね!

異論はないわよねえ〜？」（にこにこにこ）

チヨコ「う……。はい……」（がっくり）

ミコ「というわけで、最初の担当者はチヨコ姉様になりました」

カイコ「それでは、次回第1話、お楽しみに」

第0話 こうして3姉妹はレトロゲームを始めた（後書き）

こんな、小説とは言えない作品をお読みいただき、ありがとうございます。

レトロゲームをネタにした話を書いていく予定です。

題材にするゲームは、ファミコン、PCエンジン、メガドライブに限定するつもりです。

（CDROMROMとメガCDはOK）

もし扱ってほしいソフトなどがありましたら、

感想ページやら作者宛てのメッセージやらでリクエストしてください。

でも、なんでもは扱えないわ。遊んだことのあるゲームだけ。（羽川翼風に）

第1話 スーパーマリオブラザーズ

カイコ「最初はやっぱりコレ。スーパーマリオよ〜！」

チヨコ「ベタだな！」

ミコ「ベタですね」

カイコ「ふふっ。でも、まずはこれをやっておかないとダメでしょ〜？」

ミコ「なるほど……。メジャーどころを最初にやっておけば、

マイナーなゲームを取り上げて大丈夫という考えですね」

チヨコ「マイナー……。というと、『ホッターマンの地底探検』とかか!？」

カイコ「ちょ……。それはちょっと、マイナーすぎ……」

チヨコ「だったら、『バードウィーク』とか!」

カイコ「そ……。それもかなりマイナーなんじゃないかしら……」

ミコ「ミコにはちんぷんかんぷんです」

カイコ「と……。とにかく! 今回はスーパーマリオなんだから!

他のゲームのことはいいの〜!」

チヨコ「はいはい。それじゃ、始めますかね〜」

チヨコ「カセットを差し込んで……電源オン!

このオモチャっばさがいいよな、ファミコンは!」

カイコ「ふふっ、そうね。……ほら、タイトル画面よ。さっさとスタートしなさいな」

チヨコ「急かすなよ!」

ミコ「頑張ってください、チヨコ姉様!」

チヨコ「フフン、オレの腕前をとくと見よ! おっ、敵だ!」

カイコ「クリボーね」

ミコ「ジャンプして潰すんです、チヨコ姉様!」

チヨコ「それくらい知ってるぜ! ジャーンプ! ……おや?」

(SE) てれっててれってて

チヨコ「うおっ、いきなり死んだ!」

カイコ「ありがちな」

ミコ「カイコ姉、ダサイです」

チヨコ「うっさい！ くそ、ジャンプが弱すぎたってのもあるけど、

着地で避けようとしたのに、滑った感じだったぞ!？」

カイコ「ふふっ、少し滑る感じなのが、このゲームの特徴でもあるのよね」

チヨコ「『慣性』の法則ってやつか……。さすが、『完成』度の高いゲームは違うぜ!」

ミコ「ダジャレも滑ってますよ、チヨコ姉様」

チヨコ「うっさいっての!」

カイコ「気を取り直して、クリボーをやっつけちゃって!」

チヨコ「あいよ！ 今度こそっ！ えいっ!」

(SE) ペひよ!

チヨコ「よし、やった! ……って、カイコ姉、どうした?」

ミコ「カイコ姉様、なにを身悶えてらっしゃるのですか?」

カイコ「この『ペひよ』って音……! 最高だわ! はっん!

はあはあ……。早く、もう一度……」

チヨコ「……とっても変態な姉を持って、オレは恥ずかしいぜ……」

ミコ「大丈夫です。チヨコ姉様も、負けず劣らず変」

ゲシッ！（無言でチヨップ）

ミコ「……やめてください、痛いじゃないですか。

それに、コントローラーを持ったまま暴れると、バグって止まりますよ？」

カイコ「ファミコンって、衝撃とかにかなり弱いものね」

チヨコ「フン！ オレだって静かにゲームしたいさ。

ま、先に進もう。『？』のブロックだな。確か、これを下から叩けば……」

ミコ「キノコが出てきましたよ、チヨコ姉様！」

チヨコ「わかってるよ。これを取って……よし、巨大化！」

カイコ「でも、どうしてキノコで巨大化するのかしら。

すごく怪しいキノコだね。副作用とか怖いわね」

ミコ「それに、どうして着ている服まで大きくなるのでしょうか？」

チヨコ「服が脱げたら18禁になるだろ！」

カイコ「……その理論だと、『魔界村』は18禁ってことに……」
チヨコ「揚げ足を取るな！ ……おつ、この土管って確か……。よし、入れた！」

ミコ「土管に入るんですか……」

カイコ「鈴木義よじ司先生ね」

チヨコ「いつたいどこから、そういう知識を……。カイコ姉、年齢
査証してないか？」

ドガッ！（無言で蹴り）

チヨコ「痛ててて……。オレが悪かった！ 許してくれ！」

ミコ「……ミコにはちんぷんかんぷんです」

チヨコ「2-1は地下ステージだな！」

カイコ「暗くて怖いわよぉ？」

チヨコ「フフン、オレにかかれば楽勝だぜ！ フラワーゲット！」

ファイアーボールで蹴散らすぜ！ 爽快爽快」

ミコ「どうして火の玉を撃てるのでしょうか？」

カイコ「……きっとあの花、激辛なのよ」

チヨコ「食べたってことかよー！」

ミコ「確かに食べられる花っていうのもありますが……」

チヨコ「マリオはどっかっていうと、花に食べられるほうだと思
うぞ」

ミコ「パッケンフラワーですね。あれもどうして、土管から生えて
くるのでしょうか？」

カイコ「細かいことを考えてたらキリがないわ」

チヨコ「そうだぜ！ 純粹に楽しめばいいのさ！ おっしゃ、大ジ
ヤーンプ！ うおっ！？」

ミコ「あの……天井の上に乗っちゃってしまいましたよ……？」

チヨコ「そうだな……どうしよう……。下に戻れないかな……？」

カイコ「ふふっ。そのまま進んじやいなさいな。そうすれば……」

チヨコ「お……お、なんか、土管があつた！」

ミコ「土管の上に2、3、4って数字が書いてあります。

それぞれのステージへのワープですね」

チヨコ「とすると……。よしっ、3の土管へGO!」

ミコ「なぜ3なんです……?」

チヨコ「フッフッフ、まあ見てるって! 3-1スタート! そしてここで……」

ミコ「あっ、カメさんが……段差でマリオに踏み潰され続けてますよ!?!」

チヨコ「これが必殺、100UPだ!」

カイコ「説明しよう!」

100UPとは、文字どおりマリオを100人以上に増やす技のことだ!」

チヨコ「そのまんまだな!

マリオって連続で敵を踏み潰すと得点がどんどん高くなっ
ていって、

最終的には1UPになるんだ。

そのあともずっと踏み続けられれば、永遠に1UPし続け
られるって寸法さ!」

ミコ「すごいですね。ですが、マリオが100人……。どういう
仕組みに」

カイコ「細かいことは言いつこなしだっただでしょ?」

ミコ「うわぁ。なんか、雰囲気違いますね、ここ」

チヨコ「城の中だからな！」

カイコ「ふふっ。あっ、そのくるくる回転してるファイアーバー、
気をつけてね」

チヨコ「合点承知！ ……あっ！」

ミコ「あらら……。ぶつかってしまいましたね。チビマリオに逆戻り
です」

チヨコ「くそぉ〜！」

カイコ「でも、ミスにはならないから、頑張つて進みましょう！」

チヨコ「もちろんだぜ！」

そして

チヨコ「うおっ！ 炎が飛んできてるぞ！ むっ、ボス発見！」

カイコ「あれがかの有名な大魔王クツパよ〜！」

ミコ「美味しそうな名前ですね」

カイコ「ふふっ、ラスボスはプルコギよ」

ミコ「ええっ!?!」

チヨコ「嘘教えんなよ!」

ミコ「なんだ……残念です」

チヨコ「残念なのかよ!」

カイコ「ふふっ。まあ、今はクツパを倒しましょう」

チヨコ「しかしこれ、どうすりゃいいんだ。

踏んづけても、こっちがやられちまいそつだよな……」

カイコ「あら、よくわかってるじゃないの。

「ご褒美にヒントをあげるわね! 右端のオノがヒントよ

」!」

ミコ「ヒントどころじゃないですね」

チヨコ「なるほどな。よっしゃ、ジャンプ!」

カイコ・ミコ「おお〜〜!」

(クツパ、炎の海に落ちていく)

ミコ「ボスなのに、あっけないですね」

チヨコ「ま、そんなもんさ！ オレの手にかければ、ちよちよいのちよい、つてな！」

(その後も順調に進めていくチヨコ)

チヨコ「おっ！ 海の上のステージだな！」

ミコ「イカがいますね」

カイコ「名前はゲツソーよ」

ミコ「すごいネーミングですね……。でも、どうしてイカが空を飛んでいるのでしょうか？」

カイコ「もう、何度細かいことは気にしちゃダメって言わせるのよ。」

……そうだわ、今日のおやつはスルメにしましょう。

マヨネーズつけて食べましょうね〜！」

チヨコ「オツサンばいな。やっぱりカイコ姉、年齢ごまかしてないか？」

カイコ「あら、チヨコ。いらなの〜？」

チヨコ「……いるに決まってるだろ！ 大好物だし！」

ミコ「チヨコ姉様、人のことは言えないじゃないですか……」

(そんなこんなで、ついに最終面)

チヨコ「はあ、はあ……。ようやくループを抜けたぜ……」

カイコ「よく頑張ったわね。

自力で抜けられるとは思ってなかったわ〜。チヨコの頭で

……」

チヨコ「カイコ姉、ケンカ売ってんのか!？」

カイコ「ふふっ、「冗談よ〜」

ミコ「残るはラスボスだけですネ!

気合い入れてやっつけちゃってください、チヨコ姉様!」

チヨコ「おうよ!」

(そしてラスボス登場! しかし……)

ミコ「あの……これ……」

チヨコ「うむ。ラスボスの大魔王クツパだ！」

ミコ「同じじゃないですか……」

カイコ「だけど、ハンマーも投げてるし、結構大変よ？」

チヨコ「フツ、このオレをなめてもらっちゃ困るぜ！ えいやっ！」

カイコ・ミコ「おお~~~~~!!」

カイコ「一発で足の下をくぐり抜けるなんて……すごいわ〜！」

チヨコ「フフン、だてにアクション好きを豪語してるわけじゃない
つてことさー！」

で、エンディング

チヨコ「ピーチ姫！ 助けに来たぜ！」

カイコ・ミコ「おめでとう（うむいませす）〜」

(SE) パチパチパチ

チヨコ「でも、解せんな……」

カイコ「あら、どうして〜?」

チヨコ「だってさ、カツコいい王子様ならいいけど、

こんなヒゲオヤジに助けられるってのも、ちょっと微妙だ
る?」

ミコ「ま……まあ……」。

ですが、助けてくれたのですから、ピーチ姫だって素直に感
謝するのでは?」

チヨコ「でもよ、こういう場合、助けてくれた人と結婚するのがス
ジってもんだろ?」

ピーチ姫がかわいそうだぜ!」

ミコ「確かに……そうですね……」

カイコ「そんなふうに言われてるマリオのほづが、かわいそうな気
がするわ……」

ミコ「なんだかマリオが、無理矢理ピーチ姫に結婚を迫るひどい男
に見えてきました」

カイコ「こ……これ以上マリオの印象を悪くしないうちに、終わり
にしましょう!」

スルメ、持ってくるわね〜！」

チヨコ「待ってました！ おやつタイム！」

ミコ「わーい！ ありがとうございます、カイコ姉様！」

（こうして3人は、楽しくお喋りしながらスルメを美味しくいただくのだった）

ミコ「このゲッソー、美味しいですね！」

チヨコ「ゲッソー言うな！」

カイコ「ふふつ。それと、プルコギもあるわよ〜！」

ミコ「ラスボス来ましたね！」

チヨコ「違うっつの！」

……………。

娘たち、3人とも、少々変わっている気がするな……………。
いったい誰に似たんだか……………。

……俺しかいないか。妻は超真面目人間だったからな……。

まあ、ともかく。

今どきこんなレトロゲームをやらなくてもと思わなくもないが、楽しく遊んでくれているようで安心した。

これからもずっと、姉妹3人仲よくしながら成長していつてくれればいいのだが。

さて……次はいつたい、なんのゲームで遊ぶつもりなのか。俺にとっても、楽しみになりそうだ。

【ゲーム解説】

「スーパーマリオブラザーズ」

対応ハード：ファミコン 発売元：任天堂 発売日：1985年9月13日

言わずと知れた、世界一売れたゲーム。全世界で4000万本以上の売り上げを誇る。

その後もずっと続いているシリーズ。

あまりにも有名なため、とくに解説する必要もないと思うので、
これくらいで……。。

第1話 スーパーマリオブラザーズ（後書き）

こんな感じで書いていく予定です。

こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、それに、こんなネタで絵や画面写真もなくて楽しめるのか、よくわかりませんが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7085y/>

RGS ~レトロゲームシスターズ~

2011年11月21日11時41分発行